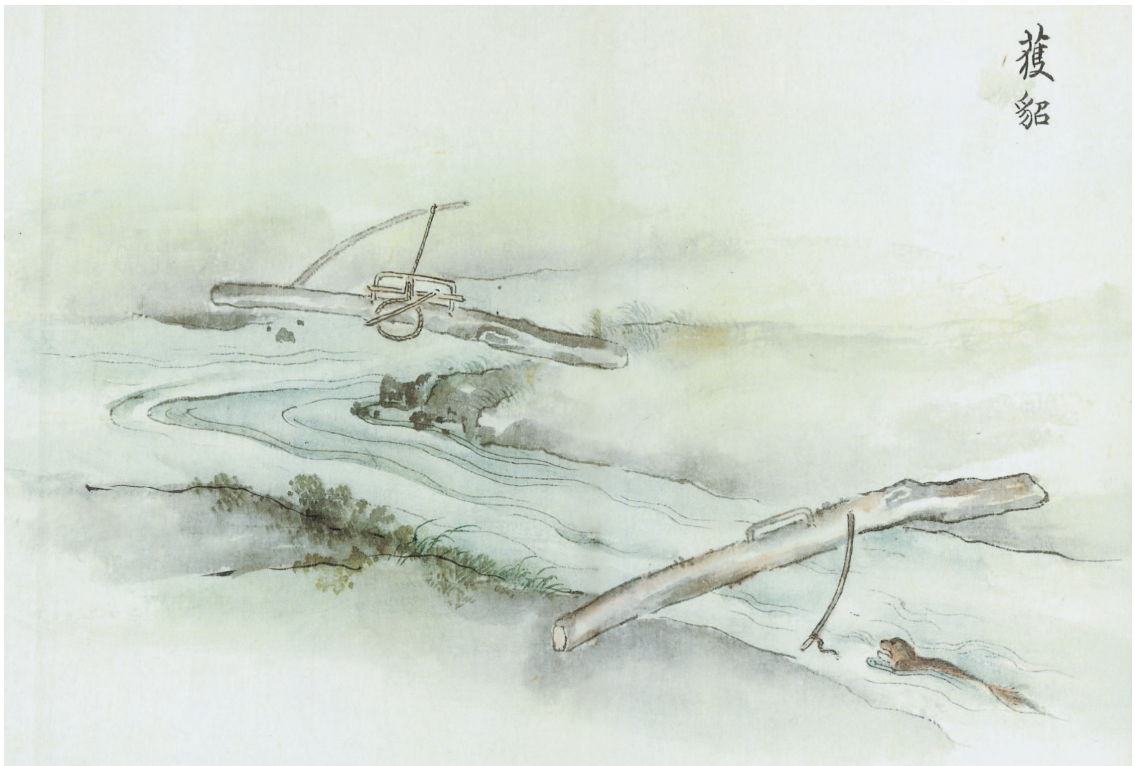


人文フォーラム

35

2011.8



CONTENTS

巻頭言

明るい時代の人間性

人文学部長 安酸 敏眞……1

Essay【新任教員紹介】

北海学園大学に着任して 柴田 崇……2

外国語学習者に寄り添って 田中 洋也……4

ルーマニア人との食事、

スペイン人とのクリスマス市 佐藤 貴史……6

My Life as an English Teacher

Brian Nielsen……8

Identity and language learning

Jérémie Bouchard……10

ゼミ室紹介

2部 日本文化学科

3・4年 田中 綾ゼミナール……12

第8回日本文化演習報告／体験記 ……15

大学院の窓

大学院に学んで 小玉 知輝……20

研究、その足跡 ……21

人文学部第15期生 卒業研究題目一覧 ……24

編集後記 ……29

北海学園大学人文学部

巻頭言

明るい時代の人間性

人文学部長 安酸 敏眞



政治哲学者ハンナ・アーレントの著作のなかに、「暗い時代の人間性について」という表題の小品がある。これは1960年、彼女がハンブルク市から「レッシング賞」を授与された際に行った講演に基づいている。わたしは講演内容に全面的に賛成してはいないが、そこで彼女が述べていることで、二つのことが強く心に残っている。一つはレッシングの「自立的思考」(Selbstdenken)ということであり、もう一つは、「各人は自分にとって真理と思えることを語ろう。そして真理そのものは神に委ねよう！」(Jeder sage, was ihm Wahrheit dünkt, und die Wahrheit selbst sei Gott empfohlen!)という、彼の書簡から引用された言葉である。

レッシングが生きた18世紀中葉は、アーレントがそう表現したように、いまだ「暗い時代」であった。信教、思想、表現などの自由もかなり制限されていた。「真理探求者」と称される彼は、そのような時代に自分の頭脳とペンだけをたよりにして、みずからに萌した真理の直観に従って誠実に生きた。レッシングの死から半世紀後、ゲーテが死の床で最後に語ったといわれる「もっと光を！」(Mehr Licht!)という言葉は、カーテンを開けて部屋をもっと明るくして欲しいという趣旨ではなく、啓蒙の運動をもっと推し進めなければならないという意味だとする解釈も、あながち穿った見方とはいえない。彼らの時代はわれわれが思っている以上にまだ「暗い時代」だったのである。啓蒙主義は、ヨーロッパの各国語——〔英〕Enlightenment、〔仏〕Lumi re、〔独〕Aufkl rung——が暗示するように、「光」のメタファーと密接に結びついている。それはひと言でいえば、明るい世の中にするための情宣・改革の運動にほかならなかった。その成果はまことに甚大で、2世紀を経た現代はまさに「明るい時代」になっている。信教、思想、表現などの自由が保障されているだけでなく、電灯の明かりが街々や家々を夜でも明るく照らしてくれるからである。

しかし科学技術の発達、われわれの生活から闇を消し去り、いまやわれわれは不夜城のごとき明るい時代に生きているにもかかわらず、われわれの人間性はどうなっているだろうか？ レッシングの頃よりも豊かな人間性になっただろうか？ 否、むしろ痛ましいほどの劣化が進んでいる。明るい時代の到来は、皮肉にも、人間性の由々しき頹落をもたらした。昨今の人間性を疑わせる犯罪の頻発は、現代人の心に巣くう闇の深さを物語っている。

人文学部が人間性に関わる学部—— the Faculty of Humanities ——である以上、この状況を見過ごすことはできない。人文学部は単に教養的知識を供与するのではなく、学生に「自立的思考」を促し、各人がしっかりした人生観・世界観を確立できるように、教育しなければならない。政府やマスコミの報道を鵜呑みにせず、また時流にも流されず、自分の頭で考えて行動する人間をいかに育成するか。「暗い時代」に息づいていた人間性の理想を、「明るい時代」にどう展開すべきか？ これは今日の人文学に突きつけられている難題である。とりわけ「新人文主義」の理念を掲げるわれわれにとって、「明るい時代の人間性」は専門の壁を超えて議論すべき中心テーマであろう。

[新任教員紹介]

● 北海学園大学に着任して

英米文化学科准教授 柴田 崇



4月に着任し、昼と夜に「メディア論」を講義している。これまで担当した講義と同様、授業に関する質問、意見などを書いてもらうコミュニケーションペーパーを毎回実施してきた。部屋が狭い、暑い、黒板の字が見にくい、なども、授業を遂行する上で大事な意見に違いないが、やはり内容に関する質問、とりわけ直感的に問題の核心を突いた質問があるとたいへん嬉しいものである。例えば、J・グーテンベルクの活版印刷技術がルネッサンスの三大発明の一つに数えられることは高校生でも知ってい



るが、その革命的性格は、宗教改革、そして出版資本主義とセットで考えなければ理解できない。活版印刷技術の潜在的能力は、宗教改革の大立者のM・ルターがベストセラー作家になること、すなわち、ルターと、そのドイツ語訳聖書に商機を見出した書籍商の存在があつてはじめて開花したのである。授業ではそのような話をして、リテラシーの変化に与えた影響からルターの思想を総括した。「活版印刷技術が発明されてしばらくは主にラテン語の写本を底本にした本の出版が続き、母語しか話せない人々の間に読書の習慣はなかった」、「識字率も低いままだったので、ゴシック様式の教会には聖書の一節が装飾として施され、教会建築は『字を知らぬ者の本』として機能していた」、「そのような状態に対し、ルター派は『文字を読めぬ者に偶像を与えず、字を教えよ!』という標語を掲げて戦った」、「宗教改革にはリテラシーを形象から文字に移行させる側面があつた」など。この授業内容について、ある受講者が「文字は偶像ではないのか?」と書いてきた。もとより文字は偶像ではない。木石でできた像と紙の上のインクのしみは、物理的性質が異なる。また、表音文字のアルファベットはシニフィアンとシニフィエのつながりが恣意的な記号であるため、「God」の文字に神の姿の片鱗はなく、文字自体を偶像とみなすのには無理がある。しかし、表象 representation として眺めるとき、文字と偶像の違いは途端に曖昧になってくる。

偶像崇拜に対する批判が実体としての神から遠ざかることに由来するのだとすれば、神のことばを紙に書き留めた文字は、偶像同様、実体から遠ざかっているのではないか。そもそも預言者が「聞いた」とされる神のことばはどのような記号として理解すべきなのか、啓示のシニフィアンとは？ シニフィエとは？……。キリスト教が世界宗教になるのに神のことばが文字で書かれるプロセスが必須だったことは間違いない。その受講生の質問は、少々大げさな言い方をすれば、キリストの現存した時代から口伝を経て書物としての聖書が生まれ、それが様々な言語に翻訳される過程で不可避免的に起きたであろう論争の歴史への入り口を指し示してくれた。そして、表音文字と表意文字の世界の文化的差異について再考するきっかけを与えてくれた。

すぐに答えられない問題もある。学生に「分からない」と言える大学教員の特権を享受しつつ、いつか答えられるよう、努力したい。



[新任教員紹介]

外国語学習者に寄り添って

英米文化学科講師 田中 洋也



ご縁があり、この4月より人文学部英米文化学科でお世話になることになりました。これまで北海道内の高等学校と前任の私立大学で英語の授業を担当し、17年間、教壇に立っていることとなります。外国語として英語を教える者としても、また英語を学ぶ学習者としても、その関心や課題が尽きることはありません。母語と同じように、同じ人間が言語を習得するのに第二言語の習得には困難をとまなうことが多く、日本の英語学習のような外国語学習環境では自分が満足できる程度まで習得に成功する人が少ないのが現状です。一方で、企業が英語を社内の公用語化するなど「英語力」への社会的な要請は高まっています。このような環境で英語教育、大学教育に携わる者として、またそれを研究する者として北海学園大学、および人文学部では次の目標を持って仕事に取り組んでいきたいと考えています。

1. 多様性に寄り添うこと

外国語教育、第二言語習得の研究では、いかに効率的に教えるのか、あるいは学ぶのか、どのようなメカニズムで母語以外の言語を身につけるのかが重要な課題ですが、学習者個人の様々な要因を探り、それに対応することも同じ程度に重要な課題です。こ

れには、学習の動機、学習への信条、学習の方法(学習方略)、性格など様々な要因があります。現在は、英語の語彙学習から学習方法の多様性への対応と支援を実践、研究しています。今後は、その枠組みを拡げて大学、学部の教育に貢献したいと願っています。

2. 自律の過程に寄り添うこと

日本の英語教育は中学、高校6年も展開しながらその成果が一向にあがらないという批判を受けます。6年は事実ですが、学習者が受ける英語の授業の時間は彼らが起きて活動する時間のわずか2%程度であると指摘されています。教室の外に行くと、目標言語との接触が限られる環境では学習者が自律して継続的に学ぶことが不可欠です。しかし、誰もがすぐに自律して目標達成に向かい邁進できるわけではあり



授業で使用している Lexinote (語彙学習ポートフォリオのスクリーンショット)

ません。それには人、ものを含めた適切な環境が必要です。環境を活かすためのスキルも身につける必要があります。自律した学習を可能にする環境づくりに向けて、ICT 活用を含めた学習支援を行うことを現在そして今後の課題として取り組んで行く所存です。

3. 学習者の言語使用を通じた成長に寄り添うこと

言語はコミュニケーションの道具でもありますが、思考をする道具でもあり、世の中を見る窓のような役割をすることもあると感じています。これまで学習者が目標言語の使用、経験を通して価値観や考えを変化させ、成長する姿を何度か目の当たりにしてきました。国際文化演

習のような短期海外研修、留学、日常の講義での海外教育機関との交流授業など様々な機会に携わり、学生が成長する過程に貢献できればと考えています。今年度は台湾の大学生との非同期型ネットワークベースの交流授業を予定しています。

ここにあげた目標はどれも一人の力で一度に達成するのは困難であると感じています。北海学園大学、また人文学部という共同体の中で皆さんのお力をお借りする場面も多くあると思いますが、微力ながら大学、学部の発展、学生のみなさんの自己実現に貢献できるよう力を尽くして行きたいと考えています。



昨年、学生引率で訪れた米国シアトルの Lake Washington から臨んだ Mt. Rainier

[新任教員紹介]

● ルーマニア人との食事、スペイン人とのクリスマス市

英米文化学科准教授 佐藤 貴史



2008年の夏から約1年間、わたしはドイツのある団体から奨学金をもらいながらミュンヘン大学に研究滞在していた。そこではドイツ以外の国々の人々ともたくさん出会うことができ、その時のさまざまな出来事は、わたしの先入観に大きな揺さぶりをかけてきた。

同じ年の冬、東西ドイツ統一の引き金を引いた市民運動の発祥地であるライプツィヒで、わたしはルーマニア人とインド人とともに食事をしてきた。つねに饒舌なルーマニア人がわたしたちに向かってこう言った。「今日の昼食は国際的だ。わたしはヨーロッパ人だ」。インド人を見ながら、「君はアジア人」。そして、わたしを指さしながら「日本人もいる」。すぐにわたしは言い返した。「いや、日本もアジアの一員だ」と。しかし、そのルーマニア人はわたしの意見を遮るように流暢なドイツ語でこう畳み掛けてきた。「日本はアジアの国とは違う。日本は日本だ！（Japan ist Japan!）」。

初めて会った外国人に、日本出身だと話すと、彼らはわたしに興味津々に質問を浴びせてきた。仏教、禅、三島由紀夫、日本の科学技術、そして土下座や切腹のことまで聞かれた。人生において土下座だけはするまいと思っていたわたしも、外国人の前ではもう二度も実演してしまった。しかし、そんな彼らも中国や韓国についてはあまり関心がないようにわたしには思え

た。

「日本は日本だ！」というルーマニア人の言葉がわたしの頭のなかで何度もこだましていた。それは別にアジアにおける日本の優越性を確認しているわけではけっしてない。そうではなく、たとえそこに日本に対する過剰なイメージがあったとしても、そのルーマニア人には日本は他とは異なる国として理解され、それを他者にも（日本人であるわたしにも！）伝えようとする情熱が感じられたからである。

考えてみれば、ヨーロッパの歴史はアジアやアフリカの国々に出て行つては、自分たちとは異なる文化を自分たちの文化のなかに同化し支配しようとしてきた歴史である。この日本だって例外ではない——もちろん、加害者として。そして、ルーマニアも第2次世界大戦後はソ連の圧力により共産主義化を強いられた国だった。

わたしが住んでいたミュンヘンにはユダヤ博物館があり、ちょっと遠出をすればダッハウという地域にナチスの強制収容所が誰でも見学できるかたちで残っていた。卒業旅行のためにミュンヘンに滞在していた日本の学生たちと一緒に冬の強制収容所に行ったことがある。言うまでもなく、そこは強制収容所が作られたような場所である。街のにぎわいとは程遠く、冬空の下、ユダヤ人を収容したプレハブ小屋や死体

を処理した建物はずっしりと重くわたしたちに迫ってきたことをよくおぼえている。



ダッハウの強制収容所の門。ナチスは「働けば自由になる」(Arbeit macht frei) というスローガンを強制収容所で掲げていた。

わたしの研究テーマであるユダヤ人の思想と歴史は、一時の例外を除けばまさに〈強制的同化と排除〉の歴史だった。15世紀のスペインやポルトガルでは、キリスト教に改宗しないユダヤ教徒には容赦なく死が宣告され、よその国に逃げるができなかったユダヤ教徒は隠れユダヤ教徒として生きていかざるをえなかった。また19世紀のフランスでは同化したと思われたあるユダヤ人将校にスパイの濡れ衣が着せられ、人種差別主義的な反ユダヤ主義が盛り上がった。そして、20世紀ドイツのナチスは、ユダヤ人を排除するだけでなく、この世界から抹殺することに全力を注いだ。

人間は、異なるものを異なるものとして受け入れるために寛容な心と繊細な精神を必要とする。ヨーロッパの異質者であったユダヤ人の文化がキリスト教という支配的な宗教とどれほど

の衝突を引き起こし、なぜヨーロッパの国々やキリスト教は異なるものを異なるものとして受け入れることができなかったのかという点にわたしは深い関心を抱いている。

ルーマニア人と食事をした1カ月ほど前、わたしは語学学校で知り合ったスペイン人と一緒にニュルンベルクのクリスマス市に向かった。ドイツのクリスマス市はキラキラした出店が立ち並ぶなかに、どこか素朴さも残されていて、わたしの美しい思い出になっている。そこでわたしはスペイン人に尋ねた。「スペインのクリスマスとドイツのクリスマスは違う?」。彼は少し考えながらこう答えた。「似ているところもあるけど、でも違うな」。彼はその違いを目一杯楽しんでいるようにわたしには見えた。

異なるものを異なるものとして受け入れることが苦痛ではなく喜びであり、その楽しさを学生に伝えるのが人文学部の教員に課せられた重要な使命だと考えている。



ニュルンベルクのクリスマス市。カップにはクリスマスの名物、赤ワインを香辛料と一緒に温めたグリューワインが入っている。

[新任教員紹介]

● My Life as an English Teacher

英米文化学科講師 **Brian Nielsen**

I have been privileged to have been born in Australia, a country whose official language is English. This simple fact has enabled me to embark on a wonderful journey as an English teacher, and has offered me the chance to work and experience many different cultures.

When I was studying my undergraduate degree in Elementary School Teaching, I never dreamed that I would go on to a career in ESL (English as a Second Language). However, when I graduated from Queensland University of Technology in 1991, there were few jobs for teaching graduates, so I decided to join a language school on the Gold Coast that specialized in teaching foreign students from Europe, Hong Kong, South Korea, and Japan. I taught there for one-and-a-half years, and it was such a wonderful job that I decided to come to Sapporo, Japan to see if I could teach English here. For the next 5 years (1993-1998) I worked at several English conversation schools in Sapporo and also began working as a part-time English teacher at Sapporo International University and Tokai University.

In 1998, I applied for a job as a full-

time foreign language instructor at the Tomakomai National College of Technology (Tomakomai Kosen) where I worked for two years. In 2000 I went to the Kushiro National College of Technology and worked there for 4 years. During this time I also studied to get my Masters degree in TESOL (Teaching English to Students of Other Languages) Working at a Kosen was a very interesting experience for me because I had to communicate in Japanese with professors of engineering and informatics. I also had to attend faculty and department meetings, which were in Japanese. I was very impressed with the effort these teachers made towards guiding students in their studies and also by the amount of concern they showed each student under their care.

In 2004, at the end of my 4-year contract with Kushiro Kosen, my Japanese wife and I decided we should return to Australia for family reasons and also because we now had a daughter and thought she would benefit from an education there. I got a job in the Queensland Department of

Education, where I worked part-time as a replacement teacher in elementary and high schools for about a year. However, I realized that teaching English was my main love, so I quit this job and took up a post as an English teacher in a Brisbane language school that specialized in preparing students for IELTS - the Australian University English entrance examination.

In 2005 I was offered a job to work as an English teacher in the Middle East in the capital of the United Arab Emirates, a city called Abu Dhabi. I taught there for 5 years in the Abu Dhabi Women's College. This was an amazing experience

because most men are never allowed to see or talk to these women, and they usually wore veils and head scarfs in class. They were wonderful students, however, and we would often share a joke in class.

As you can see, English teaching has provided me with many opportunities that I would never have had if I had chosen another profession. I still love teaching English and hope that the students of HGU will find my courses interesting, educational, and worthwhile. If you see me walking in the corridors of this university, please stop and say hello.



[新任教員紹介]

Identity and language learning

英米文化学科講師 Jérémie Bouchard



I am from Québec, a French-speaking province to the east of Canada. My first language is French, and like Japanese people I had to learn English in junior and senior high school. But I rarely enjoyed my English lessons. We often had to study grammar patterns, and had very few chances to express our thoughts in English. One of the biggest questions for us was "If I have to study English, who am I going to speak English with?" All my friends, family members and most of my relatives are French speakers. So even if we could, we often felt strange speaking in English. In fact, I remember that if someone used an English word in a conversation, (s)he was often scolded or ridiculed by others for not using a French equivalent. As a kid, it was hard for me to comprehend all of this. But since I didn't think I was going to live outside Québec anyway, I didn't think much about it.

Eventually, my mind wandered away from my immediate surroundings. Throughout college and university, my life was in English. Thanks to fantastic teachers, friends, and acquaintances, I became a bilingual person. Gradually,

the thought that I could communicate with anyone on the globe using English became reassuring to me, and the idea of life in Québec (which is a nice place to live, by the way) was ruled out. In short, language learning had triggered a fundamental shift in my personality.

In 1998, I decided to come to Japan. For the past 13 years, I have met thousands of Japanese people, many of them devoted English language learners like myself. I have also learned that English has a different kind of cultural impact here. In Japan, English represents the outside world, or something "non-Japanese". In contrast, both English and French Canadians have long shared a love/hate relationship with each other. Yet, beyond our language and cultural ideologies, we are all aware that our cultures are inextricably linked. Canada would not be the multicultural nation that it is today without this cultural back and forth.

Coming back to English, being the world's *lingua franca*, we can all agree that it belongs to everyone who speaks it. Everyone can find their personality in it. When we speak English, we do not

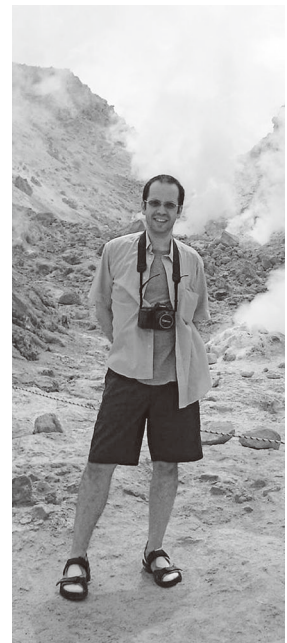
become a totally different person. Moreover, if we do not speak like native speakers do, we can still claim ownership of the language. This is the greatest contribution English has made to the world: the importance of communication in shaping global identities and world cultures.

The main point I wish to convey here is that language learning (involving the learning of any language, not just English) is an incredibly enriching process which brings us into uncharted territories both within ourselves and out in the real world. Whether we have a passion for the language we learn, or whether we resist it, language learning forces us to question ourselves. Our identities (Japanese, French or English Canadians, women, men, intellectual academics, down-to-earth blue-collar workers, Nippon Ham Fighters' fans or Giants fans) are all negotiated through everyday discourse. Nothing about our identity is carved in stone forever. Only the language(s) we use in everyday life embodies who we are.

Needless to say, for language teachers like myself, identity is a central concern. When I look at my students, I wonder what is actually happening in their mind. What elements make one student an active English speaker, and

another a reluctant one? In short, language learning has to be the most dynamic process for identity construction, destruction and reconstruction. I see this process unfolding in every class I teach.

Yet, I am not writing as a language teacher here, but rather as a language learner, now busy trying to master his third language: Japanese. I know for a fact that my experience is not unique in this world. Yet, I have learned that we, non-native English speakers, all have language ideologies that shape our relationship with English. And I don't know of any better way to reflect on and re-evaluate such ideologies than language learning itself.



ゼミ紹介

2 部 日本文学科 3・4 年 田中 綾ゼミ



ゼミ担当教員から……………

近・現代の文学作品を精読し（テキストは『文学で考える〈日本〉とは何か』）、隔週で何らかの創作に取り組むという、言語表現のゼミです。昨年は文芸誌『道憬』を創刊、今年もゼミ長と編集委員がリードし、フレッシュな誌面を企画中。ゼミ生一人一人が主役です！（田中 綾）

学生から（順不同）……………

◆この田中ゼミでは一年に一冊ゼミ誌というものを作ります。ゼミ生それぞれが自分の今書きたいものを自由に創作し、それを一冊の本にまとめ創刊するという活動です。このような大きな作品を作ることになれば、普段の活動で帯コピーを作ったり、短い小説を書いてみたりと、自分を表現する機会が非常に多いゼミなのです。授業のたびに教室はゼミ生それぞれの個性で溢れ、常にいい刺激を受けながら有意義な時間を過ごしています。（4年ゼミ長 山田 隆之）

キャッチコピー：「本当の自分に会いたい人へ」 たぶんここにいるよ→ 田中綾ゼミ

◆このゼミでは、創作活動や近現代文学を中心に取り組んでいます。秋には『道憬』というゼミ誌を発行します。田中ゼミは創作活動なら、詩でも小説でも短歌でもエッセイでも自由なので、今から自分が何を書くのか、そしてその自分の作品が本になるのがとても楽しみです。またゼミのメンバーがどんな面白い作品を出してくれるのかも、とても気になる所です。先輩や先生もとても優しく（たまに厳しい意見もありますが……）雰囲気も和気藹藹と楽しいゼミです。（3年ゼミ長 木村 圭吾）

キャッチコピー：創作をして文学の楽しみを更に知ろう。

◆ゼミ誌に代表される創作活動を通して、文学を身近に感じられるゼミです。とはいえ、近すぎてもちょっと問題なのでそこは適切な距離感で。文学を友人にするも、一生の伴侶にするも、自分次第、あなた次第。……さて、ゼミ誌のメキリ間に合うかなと。（4年 石川 大介）

- ◆皆とは少々違う視点から。我等がⅡ部田中ゼミは、酒（宴）がとても好きなゼミだ。田中先生を始め酒好きの人間が多く、呑める人以外にも酒の席が好きな人ばかりである。なので、きっと他のゼミよりもゼミコンは多い事だろう。

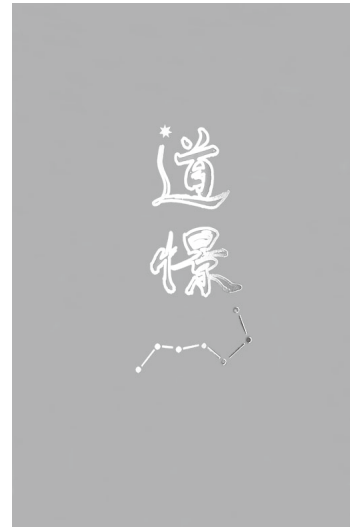
（4年 工藤 寛彰）

- ◆ゼミでの創作活動を通して、今まで向き合う事の無かった「自分」と対話することが出来ました。また、自分の創作を真剣に読んでくれる仲間や先生と出会えたことに心から感謝しています。現在はそれぞれの創作の集大成であるゼミ誌作りに向け頑張っています。

（4年 佐々木 亜沙美）

- ◆ゼミでは、小説をメインとした創作活動を主に行っています。毎回、様々な課題を行うのは大変ではありますが、課題を通して普段話しているだけではわからない、他のゼミ生の意外な一面を知ることが出来るためとても楽しいです。田中綾ゼミ大好きです！！

（4年 神 愛雅）



創刊号は A5 判、271 頁。
題字は神 愛雅さん。

- ◆「田中ゼミに入ってよかったね」「ね、ホントだよね」という会話を何度したことだろう。それは、自らの成長を肌で感じることができるから。そして、ゼミ誌という一生モノの作品をのこすことができるから。表現をみがくことで、知らなかった自分が見えてくるかも。（4年 田口 もえみ）

- ◆明るくてバカな人たちが多くて 90 分間があっという間のゼミです。何よりもディスカッションを多く用いられて非常に成長に繋がるゼミです。このゼミにいれば就職活動のグループディスカッションも問題なし。

（4年 武田 和也）

- ◆創作を通して自分と見つめ合う機会が多いゼミです。他者の作品に触れ、自分の作品に意見をもらうことで互いが刺激し合いモチベーションを高め合えていると思います。一緒に成長していける個性的な人物が集まった田中綾ゼミでございます。

（4年 永野 美由紀）

- ◆創作活動を自由に行える場所が、ここに 있습니다。自分の夢・想像力を存分に込めた作品は、ゼミ誌という形になり、缶詰めのように何年も、想いを新鮮なまま残すことができますでしょう。本を深く読む方法も、学ぶことができます。

（3年 阿部 愛美）

- ◆田中ゼミは、文学好きの学生が集まっています。小説や詩や短歌などいろいろな分野の作品の紹介があり自らも作品を作り、ゼミ誌制作に向かっていくところです。大和歌には特別な力があると信じられていた平安時代同様、文字や言葉を大切にするゼミです。

（3年 尾崎 君子）

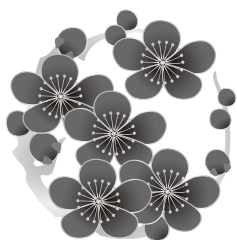
- ◆創作を人にみてもらうことは、その作品の成長には欠かせない事だと思っています。また、人の創作に触れる時の興奮は、他とは比べられません。今まで一人で創りあげてきた世界を大きく進化させるチャンスが、この田中ゼミには溢れています。

（3年 大原 愛友）

- ◆主に創作を中心とした課題やゼミ誌の制作をしています。詩や小説など創作が好きな人にはうってつけのゼミかと思います。ゼミの雰囲気は“＝先生の雰囲気”で、たいそう和やかでございます。最早私の癒しです。週に一度のこの時間をいつも楽しみにしています。（3年 角道 美弥）
- ◆ゼミでは主に近現代文学についての発表や、創作活動を行っています。文学作品への理解を深め、創作課題などを通してゼミ生全員で成長し、その成長をゼミ誌という形で残せる場所だと思います。ゼミ生も先生も、みんな素晴らしい人達ばかりなので、とても楽しいです。（3年 佐藤 尚之）
- ◆田中ゼミは、私にとって、長く気持ちよく浸かっていられる露天風呂のようなものです。ちょうどいい温度の中で、しかし温い訳ではなく、適度な緊張感を保てるゼミ。また、周囲を見渡せば、個性豊かな人たちがいて、まるで季節の自然を楽しんでいるかのようです。（3年 田村 彩織）
- ◆まるで実家に帰った時のような安心感、それが綾先生のゼミです。文学が好きな人達は、やはり色々読み取るのが得意なのかもしれません。だから綾先生のゼミでは家族と会話するのと同じくらいリラックスして意思疎通ができます。（3年 長岡 真司）
- ◆「ゼミ誌制作」という一つの目標を担った個性派メンバーで構成される田中綾ゼミ。各々の作品を己のアイディアの肥やしにしながら、創作の道をひた走る！ 自分自身の限界へ挑戦状を投げつける。生きた証の「大きな一歩」となるゼミがここにある。（3年 長谷 佳奈子）

〈創作「田中綾ゼミ」に特別なルビ（ふりがな）をつけてみると……?!〉

よ み か き 田中綾ゼミ	となりにブンガク 田中綾ゼミ	さ か ば 田中綾ゼミ	きつきとであいのば 田中綾ゼミ	わたしとみんなのあたまのなか 田中綾ゼミ	
しゅぎょうのば 田中綾ゼミ	しゃべりば 田中綾ゼミ	いろえんびつ 田中綾ゼミ	ゆめのかんづめ 田中綾ゼミ	しちへんげゼミ	チャンス 田中綾ゼミ
しゅうにいちどのわたのしみ 田中綾ゼミ	あんそくび 田中綾ゼミ	ながくつかっていらるろてんぷろ 田中綾ゼミ	へんかん 田中綾ゼミ	こいめのミックスジュース 田中綾ゼミ	



第8回日本文化演習

日本文化を学ぶ意義を再認識した旅

2010年度の日本文化演習は、2011年2月21日（月）から26日（土）まで、関西地域（大阪市・奈良市・京都市・神戸市を中心に）で実施された。同演習の目的は、日本文化の大本である関西地域で地域の風土や歴史、さらに伝統文化などに直接接することによって、日本文化の理解と関心を深めることである。

参加者は、1部41名（2年生が40名・4年生が1名）、2部12名（2年生が8名・3年生が1名・4年生が3名）、合計53名であった。今年度は、例年よりも2部の学生の参加が多かった。団体研修は、2台のバスに分乗して実施された。引率教員は、追塩千尋、郡司淳、大石和久、田中 綾、寺田 稔の5名であった。研修期間の6日間は、2月の京都にしては暖かく天候に恵まれ、体調を崩す学生もなく無事に終えることができた。

日本文化演習への参加者は、引率教員による事前講義で関西地域の風土・歴史・文学・地域文化などを学び、さらに現地での自主研修日（2日間）の計画を事前にたてたうえで現地へ出発した。バスを利用した団体研修地は、富田林市

（寺内町）、天理市（宗教都市と天理大学附属天理参考館）、奈良市（平城宮跡と大極殿）、宇治市（宇治茶の茶畑と平等院）、京都市（伏見稲荷大社）、丹後半島（丹後ちりめん、伊根の舟屋群、天橋立）、大阪市（国立民族博物館）、神戸市（異人館街）などであり、多種多様な内容と地域であった。なお、最終日の26日には、国立民族博物館で同館文化資源研究センター准教授の飯田卓先生による「日本民俗学と民具資料」と題する貴重なお話を聴講させていただいた。心よりお礼を申し上げます。

今回の研修では、関西の各地を巡ることによって、各地域の風土や歴史、さらに伝統文化など多くの事柄を幅広く学ぶことが出来たと思う。学生達は、日本の伝統文化と新しい文化が共存するなかで日本文化の奥深さや多様な生活文化の地域差などを直接肌で感じ取りながら、大学で学んでいる歴史・文化・文学など多くの知識の理解と日本文化に対する関心を深めたようである。今回の研修は、学生達にとって日本文化の奥深さを実感し、さらに日本文化を学ぶ意義を再認識した旅であった。（寺田 稔）



京都・宇治 平等院鳳凰堂にて

『絶景京都旅行記』

日本文学科 3 年 今井 智瑛

私が前回、京都を訪れたのは高校 3 年生の修学旅行の時である。時間厳守が徹底された旅行であり、自由研修で自由に散策していたのにも関わらず、私はビクビクしながら京都を散策していた。しかし、今回は余裕を持って京都を散策することが出来た。まず、我々のグループは北野天満宮に訪れた。だが、その日は北野天満宮で開催される梅花祭があった為、交通機関は混雑し、バスで訪れようとしていた我々は急遽タクシーで向かう事になった。タクシーの中では運転手さんが京都の町なり、梅花祭についておもしろおかしく説明してくれた。これも京都旅行の醍醐味であろう。そして遂に北野天満宮に到着すると大変混雑していた。美しい梅の花が咲き誇り、出店でおいしいものを食べながら我々は梅花祭を楽しんだ。次に訪れたのは、金閣寺である。私は高校時代にも金閣寺を訪れたことがあったので、さほど感動はしないだろうなと思っていたが、やはり実物を見ると興奮せずにはいらなかった。艶やかに光輝く金閣寺はやはり美しく、またその姿がゆらゆらと水面に映っているというものを揺さられるものがあった。前も見たはずなのにどうしてこうも感動してしまうのだろうか。これもまた京都の魅力だろう。日本の古き良き建物が現代もその美しさを保ちつつ存在している。私は京都に訪れて日本人で良かったと思うことが度々ある。それは、日本の四季の美しさも感じつつ日本の風情が至る所にちりばめられているからだとは感じるのであった。そして我々のグループが最後に訪れたのは清水寺である。私は清水寺も高校時代の修学旅行で訪れたことがあるのだが、その時はあまりゆっくり散策することが出来なかった為あまり記憶に残っていなかったが、今回の研修旅行で一番思い

出に残っているのが清水寺である。まず清水寺を訪れる際、我々は祇園を通りつつ二年坂を通して清水寺を訪れた。私は二年坂を歩いているとき、うっとりしながら街を歩き続けた。丁度我々が歩いている時間帯が夕方だった為、建物がオレンジ色に照らされ、何とも言えない美しさが目の前に広がっていた。そんな中、坂を登りきると清水寺に到着した。夕日に照らされている京都タワー京都全体を見渡すことが出来て、私は非常に感動したのであった。今度は紅葉の季節に京都を訪れ、日本の風情に触れながら京都を散策したいと思ったのである。



梅花祭で混雑する北野天満宮



清水寺から見た景色

雲中供養菩薩に癒されて

日本文学学科 3 年 尾崎 君子

この研修旅行は、生涯で最高の旅行であった。何が最高かと聞かれたら、私が見たいと思っていた仏像が、「これでもか!!」というほど沢山みることができたからである。思い残すことが無いくらい満足のいく旅であった。

私が仏像好きになったのは、その昔奈良の東大寺南大門に立って睨みを効かせている金剛力士像である阿吽像をみて、その大きさとあまりの迫力に圧倒されてからである。その製作者が運慶と快慶だったことから、慶派の仏像を見ることがこの旅の大きな目的であり多くの仏像のある奈良京都は、私の憧れの地であった。

京都の宇治平等院は文化財として世界遺産に指定されている。大変有名な寺院であるが、今回初めて拝観することができた。創建は1052年で、藤原道長の別荘であったものを息子である藤原頼通が寺院としたものである。なんと千年もの長い歴史のある木造建造物であり、火災防止の為厳しい入館チェック体制をとっていた。中堂に安置されている本尊が阿彌陀如来坐像である。高さ2.5mもあり、優雅なその姿にはひと目で魅了された。背後にある光背には何対もの化仏が配され、それぞれが違うポーズをとっている。その頭上の天蓋が見事で、目を見張る細工が施されている。この仏像の作者は「定朝」で晩年の最高傑作であり、定朝と分かる唯一の仏像である。(その時代には仏像に作者名を入れることが無かった) この仏

師は仏像の製作法である寄木作り技法を完成させた仏師として有名で、その技法はその後東大寺南大門の金剛力士像にも適応されており、運慶は定朝の直系の子孫である。

鳳凰堂の四面の壁には雲中供養菩薩像が52体懸架されている。楽器や持ち物や踊りで阿彌陀如来を楽しませている様に配置されており、その一体一体が丁寧に彫り込まれ表情豊かで極楽浄土の光景を表している。この像の美しさには大変驚き、雲に乗った生き生きした動きを感じさせる様には、うっとり見とれてしまった。実際自分の目で見なければ、感動は得られないと実感した場面であった。

鳳凰堂の屋根には名前の由来となった鳳凰が一對取りつけられている。これは複製で本物は鳳凰館でまづかに見ることができる。国宝に指定されていて、本物が持つ迫力と優美さには時間が止まったように感じられた。

平等院の建築や浄土庭園のいずれも、藤原一族の栄華を物語るもので当時の強大な力が京都宇治にあったことが伺われる。

ここに書いたものは旅の一部分である。沢山の感動と興奮を、学友達と体験できた貴重で贅沢な5泊6日の旅は、私の生涯の宝物になることは間違いない。宿泊先の隣の京都御所には毎朝散歩に出かけ、満開の梅を楽しめたのも幸せであった。



鳳凰堂屋根 鳳凰が胸を張っている



宇治平等院全景 この橋渡ると極楽浄土

或る意味で初めての旅、京都

日本文化学科 3 年 葛西 美稀



ガイドブックと同じ方向から撮影した
平安神宮・神苑

「旅」というものを初めて満喫した。日本文化演習を終え、まず始めに出る感想は、前記の一言である。この度の日本文化演習へは、友人の誘いにより参加した。だが、私は、日本文化演習への参加を直前まで迷っていた。理由は、私の二十年間における「旅」において、良い思い出があまり無いからである。よって、当初は乗り気ではなかった。しかし、現在の私が思うことは、「旅」というものが自身の新たな価値観の発見や視野拡大のためにあるならば、私は日本文化演習により、初めて「旅」を満喫したといえるのではないかということである。

日本文化演習の間は、とても価値ある貴重なものをたくさん見学してきた。その中で最も印象に残っているのは、自主研修二日目に訪れた「無鄰菴」である。自主研修二日目は、「京都、庭の旅」というテーマを題し、平安神宮・神苑、無鄰菴、南禅寺、二条城、神泉苑へ足を運び、見学をした。どの庭も優雅であり、歴史を感じたが、私が一番の思い出として「無鄰菴」を挙げるのは、最も「庭」というものを心から感じる事が出来たからである。「無鄰菴」は、明治・大正の元勲である山縣有朋が造営した別荘の庭園である。表門で受付をし、庭園の中に入ると、まず、その優雅さと、穏やか且つ凛とした空気に息を呑んだ。「庭」の定義を、眺めているだ

けで人の心を穏やかにし、癒す芸術とするならば、「無鄰菴」はまさに「庭」であった。母屋の縁側に腰掛け、庭園全体をしばらく眺めていると、なぜ山縣有朋が庭を好み、全国様々な個所に庭を持つ別荘を建てたのか、理解できた気がした。山縣有朋は、そこにただ居るだけで現実世界から切り離された感覚になる、自分だけの究極の癒しの空間を、別荘の庭に求めたのではないかと感じたのである。「無鄰菴」という「庭」は、本当に素晴らしい癒しの空間であった。

その他にも日本文化演習においては、一目見ただけで感動を感じたもの、日本や世界の文化を感じたもの、県民性や地域性を感じたことなど、学んだ事柄はここに書ききれないほどある。冒頭において述べたとおり、私は今まで「旅」の良さを理解できない人間であった。だが、日本文化演習を終えた現在は、本当に参加して良かった、初めて「旅」を満喫することが出来たと思っている。この度の日本文化演習の関係者の方々には心から感謝し、お礼を言いたい。



「庭」、無鄰菴

春を感じた自主研修

日本文学科 3 年 脇本 千尋



梅林（大阪城公園） ※お城も少しだけ写っている

私は今回の日本文化演習では 2 月 21 ～ 26 日の間で関西地方を回った。この研修旅行で私は関西ならではの文化と歴史に触れることができたと思っている。どれも貴重な経験だった。その中で特に印象的であったのは自主研修のときに見に行った「梅」である。ここではその中で 23 日と 25 日に行われた自主研修について書きたいと思う。

自主研修 1 日目の 23 日は大阪に行き、大阪城を見に行った。この日、私は大阪城公園に入って、そのまま天守閣に行くつもりだった。しかし私はその濠の近くにあった梅林がとても気になってしまった。その日の午前中はとても天気が良く、暖かかった。そのこともあってか平日であるにもかかわらず多くの人が梅を観に来ていたのである。梅の色は赤、白、ピンク、黄色とあってその種類も様々だった。私は当初大阪城公園に天守閣を見る時間も含めて 2 時間ほどいる予定であった。だが梅がとてもきれいだったので長居してしまったこともあり、結局 4 時間後に大阪城公園を出た。

25 日の自主研修には京都の北野天満宮で毎年 2 月 25 日に催される梅花祭を見に行った。この神社は主神として祀られている菅原道真が愛していたという梅の名所になっている。梅花

祭は菅原道真の命日とされ、毎年道真を偲んだ祭である。梅花祭では「梅花祭野点大茶湯」という茶会や毎月 25 日に開かれる天神市とよばれる縁日などが重なっている。そのため、この日は終日まで多くの人々で賑わっていた。またこの場所では梅が境内に数多く植えられている。その中で梅苑というところは数多くの梅が植えられている場所である。この日はその公開日でもあり、そこへ私は行った。中は大阪城の梅林と違い、梅林より梅の木が多く植えられているようで辺りには梅の香りがしていた。入口には「五分咲き」という張り紙があったが、それでも十分楽しめるものであった。北海道では梅は桜と一緒に咲く光景がよく見られるため、私は梅の良さが分からないでいたが、この自主研修で見ることのできた多くの梅によって春の訪れを感じることができた。

以上のように今回の研修旅行で私は様々な文化に触れ、感じるすることができた。ここに書いたのはその一部である。時には一日にいくつかの場所を回ることがあり、とても忙しく感じた。しかし忙しいながらもとても楽しく充実し、とても貴重な経験であったと私は思っている。



梅花祭野点大茶湯（北野天満宮）
舞妓さんがお茶を出している

大学院の窓

大学院に学んで

文学研究科 日本文化専攻 修士課程 1 年 小玉 知輝



私は今年の 4 月に大学院に進学しました。入学から、早 3 カ月近くたち、徐々にではありますが大学院での勉強にも慣れてきました。しかし、自分の至らなさを痛感する機会も多く、もっと精進しなければならないと日々感じています。

大学院に入ろうと思った動機は、大きく二つあります。一つ目は、小学生のころから歴史が好きで、中学・高校・大学と進んでいくうちに、もっと深く日本史について学びたいと考えるようになったからです。二つ目は卒業研究で満足のいく成果を出すことが出来ず、進学してさらに自分のテーマについて研究を続けたいと考えたからです。私は、卒業論文で奈良時代末期から平安時代初期にかけての怨霊——政治的な事件によって敗北し怨霊となった人物、について研究をしました。しかし、私の力不足のため、まったく納得のいくものにならず、やり直したいとまで思いつめました。また、論文で扱った以外にも、怨霊は数多く存在しており、彼らについても知りたいと考えるようになりました。私の大学院進学について、両親は当初反対でしたが、最終的には背中を押してくれました。

大学院における講義はすべて少人数で行われ

ます。私が受講している講義では、最小で 1 人、最大でも 4 人に過ぎません。このような人数なので、先生と直接対話する機会も多く、文字通り学び問う授業が展開されます。

私の指導教員である追塩千尋先生の演習では、律令国家が編纂した歴史書の一つである『日本三代実録』（901 年成立）という漢文で書かれた史料を受講生が分担して読み、その内容や関連事項について発表しています。先生からは各人の発表についてその都度様々な指摘がなされます。先生のご指摘は、怨霊自体についてもさることながら、それを生み出した時代や社会を知るうえで、大変参考になります。予習自体は大変な作業ではありますが、原典にあたって歴史を読み解く力を養うべく、勉強に励んでいます。

勿論、将来についての不安はあります。しかし、人生のうち、物事を突き詰めて考えることのできる時間は、そうはないのではないのでしょうか。だからこそ、私はこの恵まれた機会を大切に、悔いの残らないように研究をしたい。今は歴史を学ぶという初志を貫徹すべく、修士論文の完成を目指して更なる精進を続けたいと考えています。

■学会・研究発表

岩崎まさみ

「日本における北の海の捕鯨」3月11日～13日、国立民族学博物館主催『国際シンポジウム：世界の捕鯨文化の過去、現在、そして未来』にて

佐藤 貴史

「レオ・シュトラウスとユリウス・グットマン——〈学問と生〉、そして〈神と自然〉——」3月、第17回政治哲学研究会、早稲田大学
「レオ・ベックにおけるユダヤ教とキリスト教——共通コンテキストとしての歴史主義の問題をめぐって——」6月、シンポジウム「ユダヤ教とキリスト教」、日本基督教学会北海道支部会、北星学園大学

■著作・論文など

著書

追塩 千尋

『中世南都仏教の展開』（単著）6月、314頁、吉川弘文館

論文

岩崎まさみ

「グリーンランドにおける捕鯨活動にみられる諸問題」2010年7月、『人文論集』第46号、北海学園大学人文学会、1-39頁
「先住民による捕鯨」『国立民族学博物館調査報告97：海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会』197-224頁

上杉 忍

「講座（2）グローバリゼーションとアメリカの地域コミュニティ、そして国家」（シンポジウム・2010年度北海学園大学市民公開講座「文化再発見～人間回復の地域づくり」）3月、『学園論集』第147号、北海学園大学学術研究会、225-234頁

上野 誠治

「グリムの法則とヴェルネルの法則の接続について」3月、『人文論集』第48号、北海学園大学人文学会、17-41頁

小野寺静子

「笠女郎の歌——譬喩歌三首——」3月、『人文論集』第48号、北海学園大学人文学会、(二三)～(三五)頁

佐藤 貴史

「近代日本におけるユダヤ人問題の一断面——レオ・ベック=有賀鐵太郎往復書簡について——」（共著）1月、『思想』第1041号、岩波書店、16-31頁
「ユダヤ・ルネサンスの行方、ローゼンツヴァイクの挫折——20世紀ユダヤ思想史における近代批判の諸相——」5月、『思想』第1045号、岩波書店、151-174頁

柴田 崇

（論考）「前を見ること—マクルーハンの詩論」（90-99頁）／（著作解題）「マクルーハン理論」（30-33頁）／（著作解題）「グーテンベルクの銀河系」（34-37頁）『マクルーハン』2月、河出書房新社

田中 綾

「歌人と戦争責任——その基層に錨を降ろして」6月、『作家と戦争 太平洋戦争70年』、河出書房新社、24-30頁
「短歌という器の可能性」6月、『社会文学』34号、日本社会文学会、57-67頁

手塚 薫

「講座（5）地域への調和～博物館の再生に向けて」（シンポジウム・2010年度北海学園大学市民公開講座「文化再発見～人間回復の地域づくり」）3月、『学園論集』第147号、北海

学園大学学術研究会、265-278 頁

中川かず子

「日本語の副詞 2—数量を表わす副詞表現」『日本語ジャーナル』2 月号（韓国 DRAKWON 社／台湾鴻儒堂書局；以下同）

「日本語の副詞 3—判断、予測を表わす副詞表現」『日本語ジャーナル』3 月号

「日本語の副詞 4—期待、希望、諦めを表わす副詞表現」『日本語ジャーナル』4 月号

「日本語の副詞 5—擬態語副詞（1）人間の感情と態度」『日本語ジャーナル』5 月号

「日本語の副詞 6—擬態語副詞（2）人間の行為—食べる／飲む／話す」『日本語ジャーナル』6 月号（各号とも、17～23 頁）

濱(浜) 忠雄

「ハイチ史における植民地責任—『アメリカによる軍事占領』をとおして」3 月、『学園論集』第 147 号、北海学園大学学術研究会、143-162 頁

安酸 敏眞

「クリオとヘルメース」3 月、『人文論集』第 48 号、北海学園大学人文学会、43-95 頁

■講演など

田中 綾

「こどもと言語表現」1 月、名寄市立大学短期大学部“こども”セミナー（名寄市立大学）

「短歌に親しんでみませんか」5 月、キャリアバンク「朝活」（キャリアバンクセミナールーム、札幌）

■評論・エッセイなど

小野寺静子

「大伴家持と恋歌」4 月 1 日、『北海道新聞』夕刊

佐藤 貴史

（書評）ハインリッヒ・マイアー『レオ・シュトラウスと神学—政治問題』（石崎嘉彦・飯島昇藏・太田義器 [編訳]、晃洋書房、2010 年）、『図書新聞』5 月 21 日

田中 綾

（書評）村山寿朗著『石田比呂志のレクチュール』（短歌新聞社）、『短歌新聞』2 月 10 日

（書評）菅聡子著『女が国家を裏切るとき』（岩波書店）、『図書新聞』4 月 16 日

（評論）「全国歌誌展望」『短歌』1 月号、2 月号、3 月号

（時評）「歌の周囲」『現代詩手帖』1 月号◇2 月号◇3 月号◇4 月号◇5 月号◇6 月号

（コラム）「書棚から歌を」『北海道新聞』1 月 9 日◇1 月 16 日◇1 月 23 日◇1 月 30 日◇2 月 6 日◇2 月 13 日◇2 月 20 日◇2 月 27 日◇3 月 6 日◇3 月 13 日◇3 月 20 日◇3 月 27 日◇4 月 3 日◇4 月 10 日◇4 月 17 日◇4 月 24 日◇5 月 1 日◇5 月 8 日◇5 月 15 日◇5 月 29 日◇6 月 5 日◇6 月 12 日◇6 月 20 日

■翻訳

佐藤 貴史

「レオ・ベック＝有賀鐵太郎往復書簡」（共訳）1 月、『思想』第 1041 号、岩波書店、7-15 頁

■研究費

上野 誠治

平成 23 年度北海学園学術研究助成・共同研究（代表：船岡 誠）、「新人文主義の位相—基礎的課題—（継続）」（研究分担者）

佐藤 貴史

青山学院大学総合研究所 2011 年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学

の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）

常見 信代

科学研究費補助金（基盤研究 B）、研究代表者、研究課題「中世のブリテン諸島における教会組織の再検討」

手塚 薫

科学研究費補助金 基盤研究（C）「千島列島における資源・土地利用の歴史生態学的研究」（研究代表者）

総合地球環境学研究所研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」（研究班員）

開発研究所総合研究『分権型社会における地域自立のための政策に関する総合研究』（研究参加者）

安酸 敏眞

科学研究費補助金（基盤研究 C）、研究代表者、研究課題「解釈学と歴史主義——A・ベークと J・G・ドロイゼンについての事例研究——」平成 23 年度北海学園大学学術助成・共同研究（代表：船岡 誠）、「新人文主義の位相—基礎的課題—（継続）」（研究分担者）

■その他

大谷 通順

第 10 回「漢語橋」世界大学生中国語スピーチコンテスト北海道予選大会審査員、6 月、中華人民共和国駐札幌総領事館・札幌大学孔子学院主催、札幌大学

手塚 薫

国立民族学博物館『文化資源共同研究員』通年
北海道立北方民族博物館『研究協力員』通年

中川かず子

第 40 回北楡杯争奪学生競技ダンス北海道連盟招待試合、大会会長、5 月 15 日、北海道大学第一体育館

〈日本文化学科〉

・指導教員 菅 泰雄

- 河 上 智 子：敬語の誤用について
 後 藤 大 心：巨大ロボットアニメにおける主題歌の変遷について
 澤 野 暁 悟：あだ名と愛称の違いについて—MLBとNPBを比較して—
 若 林 宗 由：「ことば」感覚—音とイメージと語感—
 瀬 田 裕 子：日本語のテンス—非過去形における過去用法の考察—
 岡 まゆみ：プロ野球中継からみたラジオ放送とテレビ放送の特徴

・指導教員 徳永良次

- 石 田 真梨奈：誰が『落窪物語』を書いたのか—作者研究の現状と今後の展開について—
 猪苗代 茜：犬が社会に与える影響—人類最大のパートナーである犬が私たちにもたらすもの—
 王 子 なつみ：複合語の要素として使用される「かわいい」の役割について
 大 滝 いづみ：漢字の伝来から現代の日本語になっていく過程
 坂 本 美 樹：小説家・奈須きのこ宮部みゆきの研究—それぞれの小説の魅力の共通点と相違点—
 佐 藤 一 也：日本人の現状—最近の傾向と「個人的な名前」—
 福 井 弘 子：日本の忌み意識の変遷
 村 田 紗 織：紫上の結婚についての考察—平安時代の婚姻制度から—

・指導教員 中川かす子

- 安 藤 光：日本人大学生とアメリカ人大学生のあいさつ言語行動についての比較研究—日常生活でのあいさつ言葉を中心に—
 大 角 真 季：ウチ・ソト意識に基づく日本語表現
 海 原 沙 紀：花の名前における外来語・カタカナ語の浸透
 岸 部 雅 峰：若者言葉—若者言葉は日本語の乱れか—
 塚 田 和 嗣：第二言語学習における学習ストラテジーの考察—英語話者モデルを中心に—
 富 田 杏里紗：北海道方言のゆくえ—方言の変容と今を考える—
 星 宏 美：日本語の「ウチ・ソト・ヨソ」と「若者言葉」
 水 尾 有 菜：日本語の使い方—高校生から見た日本語—
 北 村 里 歌：日本語における「配慮表現」について
 竹 原 一 幾：現代人の読書の変化
 石 井 一 矢：日本とイギリスの文化比較—名づける観点から—
 井 上 敬 太：現代日本の若者の日本語に対する意識について
 大 矢 理 彩：欧州と東アジアの女性の社会的地位についての比較

- 櫻 田 実 可：ファッション文化比較
 柴 垣 晶 子：村上春樹『1Q84』からみる日韓外来語・漢字語比較
 星 井 春 花：異文化間コミュニケーションの比較

・指導教員 大石和久

- 亀 谷 歩 美：ディズニー版 プリンセスストーリーの方程式—ディズニーが女の子にかける魔法—
 加 茂 静 夏：音楽映画の現在と未来
 工 藤 剛：『王と鳥』のプロット分析
 後 藤 佳 祐：ドキュメンタリーとは
 尻 高 彩 織：『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』が傑作と呼ばれた理由
 新 里 ひかる：ミュージックビデオの魅力とは
 林 沙 織：ティム・バートンと、俳優の役割の重要性についての考察
 稗 貫 舞 也：ミュージカル映画とは何か—『サウンド・オブ・ミュージック』を中心として—
 日 置 沙 織：筒井康隆原作『時をかける少女』が魅力的な理由—なぜ何度もリメイクされるのか—
 藤 田 しのぶ：The Phantom Of The Opera（オペラ座の怪人）—音楽と感情からみる魅力—
 横 山 詩 帆：『シックスセンス』が持つ「秘密」とは？
 萬 ま み：『風の谷のナウシカ』から見るアニメーションの本質
 大 高 昌 子：ハリウッドにおける「B 級映画」の定義
 鈴 木 翔 大：映画音楽の歴史と映画音楽が映画に与える効果
 小 川 優 奈：『SEX AND THE CITY』の世界
 亀 井 健太郎：マンガにおける「同一化」〈媒介者〉〈傍観者〉—竹内オサムの理論に即しながら—
 近 藤 健 司：アニメの可能性—テレビアニメを中心に—
 榊 原 清 久：『トイ・ストーリー』の世界観と映画表現
 佐 藤 宇 恵：映像における音響効果の機能について
 佐 和 優 希：マクロスシリーズ研究—“マクロス”そのパリエーションと不変の構造—
 武 岡 実 里：『AKIRA』が世界に求められた理由
 門 前 大 介：喜劇王チャップリンの映画に関する考察

・指導教員 須田一弘

- 池 下 花 織：ビートルズ〜彼らが世代・国境を越えて愛される理由
 石 河 順 一：ヘヴィメタルとは実際どのようなものなのか—比較と検証—
 井 上 舞：化粧品動物実験—命の浪費と動物保護—
 岩 田 紗央里：陸上競技というスポーツとは
 蠣 崎 みなみ：着物と女性の社会的地位
 笠 井 淳 史：枝幸砂金地の歴史と山の神の信仰について

梶 美奈代：北海道と沖縄の食文化の比較
 鎌 田 彩 実：イオマンテに見るアイヌ民族の信仰と文化
 小池田 拓 也：徒歩旅行とは
 後 藤 俊 史：土下座
 齊 藤 佑里子：道の駅—道の駅が社会に与える効果と影響—
 佐 藤 渚：オンラインにおける文化形成について
 荘 司 杏 奈：北海道の伝説
 白 川 絵 梨：「水文化」とは—水遊びに見る、水文化の重要性について—
 菅 原 里 奈：嫉妬の鬼と橋姫伝説
 高 道 英里子：滝波考
 西 山 友 絵：「負」としてのイレズミ
 本 村 遼：介護誕生の背景と展望の研究

・指導教員 郡司 淳

伊 東 麻 衣：新聞報道の過去と未来
 角 入 隆 文：ゆとり教育を考える—真の「脱ゆとり教育」のために—
 斉 藤 雄 太：「部活動」の理念と実際—人格形成と競技力向上の関係性構築のための試論的考察—
 佐 藤 元 展：天理教の北海道伝道
 成 田 あゆみ：日本人と海—人と海の関係性にみる西洋と日本—
 東 田 夏 実：札幌における女子教育のあゆみ—北星女学校を中心として—
 古 川 由 紀：米に魅了された日本人—北海道米今昔物語—
 森 菜摘子：板垣征四郎の伝記的研究—たゞ「無」又は「空」—
 山 本 侑 奈：「いき」再考—日本文化論研究序説—
 吉 成 毅：戦時厚生事業と障害者
 渡 辺 篤：明治期北海道における国民意識の形成—未完の北海道の視座から—
 稻 垣 江莉子：平和主義とは
 柴 田 藍：当別町の現在と未来
 八 村 聖 美：ブログ時代の自己開放とコミュニケーション
 中 坂 允 是：ある推理小説—探偵批判の試みとして—

・指導教員 テレングト・アイトル

板 垣 里 未：太宰治『新ハムレット』—「ハムレット」日本受容の歴史の視点から—
 大 原 智 明：漱石と山—「行人」を中心に—
 鹿 糠 春 華：『金閣寺』と『五番町夕霧楼』—金閣寺放火事件を巡る二つの物語—
 村 上 和 樹：夏目漱石の『こころ』における「先生」の「恋の衝撃」—非媒介的な欲望—
 山 崎 舞：宮沢賢治と星—『銀河鉄道の夜』に見る星の観察—

・指導教員 小野寺静子

板 谷 麻 美：山上憶良—「子等を思ふ歌」からみる—
 松 田 悠 乃：笠女郎—「初期」の歌をめぐる—
 岡 西 恒 輝：神武東征論
 雨 下 純 貴：大伴家持と坂上大嬢の関係性

穴 戸 瑞 希：高橋虫麻呂からみる伝説歌、伝説歌人のあり方
 谷 貴 博：笠女郎と大伴家持
 宮 野 芳 暢：大伴宿禰家持が愛した女性
 堀 井 明 美：史生尾張少昨の浮気

・指導教員 田中 綾

伊 藤 佑 太：学校教育現場に於ける現代文の取り扱い—人格の完成を目指し、大学入試センター試験で八割以上を得点する力をつける授業とは—
 上 田 春 菜：『ひょっこりひょうたん島』のターニングポイント—「ライオン王国の巻」から「マジョリタンの巻」までの考察—
 笠 谷 しおり：探偵小説における幻想性—『匣の中の失楽』から見るその意義—
 鎌 田 舞 子：〈少年嗜好症〉—稲垣足穂初期作品における少年と宇宙・時間について—
 工 藤 あかり：宮沢賢治論—「異界」と「甘え」、そして「再生」—
 工 藤 恵里奈：山田詠美『トラッシュ』論—他者の「うつろいやすさ」と自己の確立—
 小 谷 まどか：椎名林檎の描く世界
 清 水 拓 哉：文学作品の映像化における文学的立場の立証—江戸川乱歩と横溝正史に着目して—
 菅 野 格：「コード」の探求—その小説作品をめぐる読解分析—
 高 橋 碧：横溝正史作品『獄門島』—金田一耕助の視点から戦争直後の日本の姿をみる—
 芳 賀 詩緒里：井伏鱒二と青木南八—亡き友が残した「鯉」—
 柳 澤 佑 奈：『魔術』—境界線に見る芥川龍之介の倫理観—
 横 山 遼 美：三浦綾子『氷点』論—時代に「語り」かける力—
 今 宮 昂：創作『夢か現か』
 家 永 美 紀：創作 小説『わすれもの』
 池 田 和 利：島木健作『赤蛙』論
 川 村 恵莉夏：創作 自作詩の立体版
 小 林 龍 也：創作 小説『羽根を追いかけて』
 近 藤 悠：『禽獣』主人公論—禽獣と千花子の観点から—
 土 田 恵 大：創作 小説『雲間』
 内 藤 梨 沙：坂口安吾 作品における国民への叫び—『墮落論』から『白痴』まで—
 中 川 和 貴：創作 小説『以後の日記』
 中 村 史 志：創作 小説『ボラリスを探して』
 波 菜津子：古井由吉を読む—「人形」に見る人と土地の関係性—
 古 澤 純 樹：創作 小説『贖罪』
 山 本 幸：創作 「愛の詩」

・指導教員 追塩千尋

青 野 藍：平清盛と日宋貿易
 石 宮 愛 美：『靈異記』と『今昔物語』における地獄
 奥 村 拓 也：為政者としての木曾義仲—義仲「政権」

の破たん—

- 小 西 里 奈：源義経の人物像—『義経記』を中心に—
 高 山 晶：オホヒルメノムチと邪馬台国女王
 田 中 結 麻：女帝の即位とその役割についての一考察—推古・皇極（斉明）天皇を中心に—
 三 浦 麻衣子：麿戸皇子が目指した日本
 諸 中 愛 奈：説話作品にみる閻魔王信仰の変遷—人々が閻魔王に求めたもの—

・指導教員 船岡 誠

- 荒 井 孝 典：長谷川等伯の美術表現における魅力
 片 山 伸：日蓮の死生観
 記 田 晴 菜：新撰組と藤堂平助
 菅 原 真奈美：利休の功罪
 鈴 木 彩 乃：親鸞における往生
 竹 下 香 織：おしどりの行方—浅井長政とお市の方—
 辻 恭 平：蓮如の布教
 道 場 悠：空也伝の一考察
 長 崎 多 恵：遁世僧の世界
 樋 口 由 佳：狐は神か、化け物か—稲荷との関連から見る狐—
 山 岸 実香子：四九年—睡の夢—上杉謙信の出家と後継者問題
 吉 田 尚 未：赤穂浪士の見られなかった裏の素顔
 赤 石 航 太：一休とは？
 柏 貴 子：明恵が見た夢
 赤 井 元 氣：禅から影響を受けた人物
 石 川 祥 子：紫衣事件と崇伝
 岩 佐 有 子：真言立川流
 納 谷 泰 斗：『戦国武将の武力』
 成 田 千 裕：古代における庭園意識とその思想
 西 村 拓 也：人身御供の研究
 深 澤 充：神仏習合—日本の信仰の形態
 福 田 千 紘：菅原道真と天神信仰を追って
 堀 明 敬：日蓮と四箇格言—念仏について—

〈英米文化学科〉

・指導教員 井上真蔵

- 高 橋 早 紀：『フルハウス』に見るアメリカの特徴—比較文化の視点より—
 田 中 里 沙：シャネル—「CHANEL」ブランドを世界に—
 近 井 修 子：カナダ人の子育てと価値観—異文化理解の視点から—
 原 しおり：日本マクドナルド創業者藤田田—マクドナルドはなぜ日本に根付いたのか—
 檜 田 明 里：海を越えたミッキーマウス—夢の国の文化摩擦と成功—
 本 地 穂斗里：中絶と良心—アメリカカトリック教会の視点から—
 山 道 理 奈：林流コミュニケーション—林文子が成功した理由—
 吉 田 綾：柳井正—ユニクロの世界への挑戦—
 幸 村 絵 里：デュープ・スペクターの観た日本
 瀬 尾 和 俊：イチローの成功—異文化への適応と偉業達成—
 中 山 友加里：アーミッシュ—異文化アメリカの中で存続しえた理由—

・指導教員 岩崎まさみ

- 伊 藤 千 春：移り変わる和菓子の存在
 風 林 美 波：道南の郷土料理と現在の食生活
 加 藤 静 佳：歴史と文化をもつクジラ—クジラは環境保護のシンボルという認識と未来の漁業—
 草 場 麻 未：カルチャーショックと適応の過程
 澤 田 遥：時代で変わる身体的装飾と文化
 屋 敷 祐 介：カレーが辿った道筋
 渡 邊 崇：「They called me Mayer July」の翻訳
 菅 原 康 平：シャネルの 20 世紀的な生き方
 松 村 優 輝：動物と人間
 榮 田 一 茂：顧客の変化
 櫻 井 幹 彰：日本人にとって心地よい空間とは何か
 藤 川 清 則：ハワイ先住民族の歴史と文化復興、主権回復運動について
 水 嶋 莉 紗：マクドナルドによる日本の変化

・指導教員 上杉 忍

- 奥 村 悠：1980 年代以後のアメリカにおける同性愛をめぐる抗争—同性愛者の差別撤廃運動と宗教原理主義運動の巻き返し—
 鬼 塚 宏 志：古代ギリシアと古代中国—西洋人の個人主義と東洋人の集団主義の起源—
 古 関 直 人：戦後日本の安全保障体制の形成—吉田茂の講和構想—
 穴 吹 実 織：エメット・ティル殺害事件とその背景
 田 中 祐 花：アメリカの医療保険制度改革—アメリカ医療保険の現状・歴史とオバマの改革—
 土 谷 陽 平：メキシコ系民衆の公民権・民族的自決権要求運動としてのチカノ運動
 中 嶋 あゆみ：サーフィンに象徴されるハワイ伝統文化の衰退と復興

長 井 真布由：現代世界における食習慣の変化による顕著な健康被害と政府の対策をめぐる論争—『食と農の総合政策』に向けて—

松 井 昂：中国の海洋進出—資源と覇権を求めて—

山 室 沙智恵：アメリカン・ミュージックの成り立ちとその融合

岡 本 拓：アメリカの大学生の借金地獄—学費の高騰と民間奨学金会社による『奨学金』という名の高利貸しの現状—

伊 藤 真理子：化粧の歴史と現代の化粧

石 川 貴 久：第二次世界大戦—その経緯と国際関係—

井 野 歩 夢：映画『ザ・コーポレーション』と『キャピタリズム—マネーは踊る—』における資本主義社会と企業の在り方について

菊 池 遼 太：ウォルマートの創業者サム・ウォルトンの経営戦略と、その成功の鍵

七 条 梢：アメリカ政府はなぜ民間軍事会社を黙認するのか—傭兵制度の歴史的伝統と現代の民間軍事会社の現実—

對 尾 淳 子：南北戦争の膨大な被害とその要因

藤 江 和 希：公民権運動におけるマーティン・ルーサーキングの思想とその役割

・指導教員 上野誠治

岩 木 翔 太：人物を表す接尾辞と歴史的職業観の関係性

杉 森 亮 平：英語の時制と相の考察

得 田 琴：品の良い話し方とは何か—英語と日本語の比較—

林 崎 なつみ：受動態の日英比較

藤 田 久美子：初等・中等教育段階の公教育における英語教育

三 浦 淳：前置詞の多様性に関する考察—at, in, onの可能性—

山 内 智 仁：英語の新語形成に関する考察

吉 田 豊 美：英語における冠詞

・指導教員 川上武志

小 倉 大 輝：『オズの魔法使い』～Lyman Frank Baumが子供達を喜ばせるために書いた本～

小野塚 萌 実：Darren Shan～ラーテン・クレプスリーがもたらしたもの～

加 藤 友 美：ハリー・ポッター—個性豊かな教師達の分析—

木 保 拓 人：The *Inchcape Rock*～込められた意図を探る～

小 林 里 実：ガリヴァー旅行記～フィクションの中のノンフィクション～

佐 藤 優 祐：John Ronald Reuel Tolkien—トールキンが描く世界観—

中 村 真 美：Oliver *Twist*—「悪い人」たちは自分の生活を変えることができなかったのか—

細 貝 竜 也：ボブ・ディランの「一貫性の欠如」に見る真の姿

大 窪 八千代：シルヴィア・プラスが求めた愛一心を置くべきはどこに在ったか—

長 内 拓 哉：ルイス・キャロルの思い～『不思議の国のアリス』に託したもの～

菅 野 恭 介：多元的存在の認知

小 松 由美恵：Jane Eyre—トラウマを乗り越えて—

山 本 千 花：象徴として描かれたRobinson Crusoe—行動からみられる人間性—

八重樫 英 利：O. Henry 作品についての考察—言葉のトリックから生み出される世界—

・指導教員 桑原俊一

池 上 詩 織：レオナルド・ダ・ヴィンチ—ルネサンス期の絵画—

石 川 愛 実：アメリカにおける黒人奴隷の歴史—奴隷貿易の始まりから南北戦争に至るまで—

北 村 あすさ：ギリシア神話—起源をめぐって—

小 松 かおり：西洋音楽の歴史

佐々木 麻 実：地中海の三大食材—パン・ブドウ酒・オリーブ—

志 村 沙緒理：アクセサリ—アクセサリーの存在意義—

末 松 志 保：アメリカの肥満とファーストフード—肥満増加とファーストフードの関係—

丹川元 温 美：香料文化の始まり

吉 田 理奈子：パレスチナ問題とは何か—ユダヤ人迫害と他国からの干渉—

永 末 加奈子：西洋女性の服飾文化—衣服の変遷と社会的立場の関わり—

・指導教員 竹内 潔

毎 田 千絵美：日常生活の中での眼病の予防について考える

山 口 沙 織：近年日本の少子化、および高齢出産と日本社会の構造との関係を考える

桑 田 夕 貴：不妊治療について考える

竹 原 圭 一：新型インフルエンザについての理解

・指導教員 常見信代

五十地 梢：ターナーの芸術

木 村 陽 子：エドワード・ベンジャミン・フリテン

工 藤 ありさ：女王陛下の海賊—Sir Francis Drake—

國 本 友紀子：エドワード・エルガー—独学からつかんだ栄光

熊 谷 彩 音：ジェントルマンのスポーツクリケット

坂 本 恵 太：国富流出論争から見るイギリス東インド会社

柴 崎 知 世：創られた伝統—クラウン・タータン

西 村 優 美：ヴィクトリア時代の女性家事使用人

水 谷 好 輝：パクス・ブリタニカとパーマストン

堺 浩 之：J.M. バリとピーター・パン

栗 野 仁 美：ヴィクトリア女王とアルバート公

長谷田 貴 之：フットボールとイギリス

・指導教員 濱 忠雄

泉 谷 直 也：中世の建築—キリスト教の精神と芸術性—

- 蛸 子 晃：フランス革命—バスチーユ陥落からナポレオン時代までと、革命期の女性たち—
- 荻 洲 美 幸：十字軍—その歴史と目的—
- 葛 西 高 成：命を裁く制度—ヨーロッパにおける死刑制度の研究とその考察—
- 日 下 恵 介：産業革命期のイギリス社会の様相—産業革命の開始から階級闘争の展開まで—
- 笹 拓 平：百年戦争—百年戦争とナショナリズム—
- 鈴木 篤 史：中世ヨーロッパにおける賤視と拷問
- 長 尾 望 未：マリア・テレジア—オーストリア・ハプスブルクの偉大な女帝—
- 藤 島 佑 太：第二次世界大戦下のヨーロッパ—ナチスドイツの台頭—
- 伊 藤 文 展：ベルリンの壁と欧州の変化—壁の崩壊とドイツ統一から 20 年—
- 菅 原 一 恭：マーティン・ルーサー・キング Jr. の生涯—思想形成と公民権運動での実践—
- 久 保 陽 子：ヨーロッパの食文化
- 櫻 井 匡 希：古代オリンピックから見えてくる古代ギリシア人の精神性—同じ言語・宗教・民族である彼らが時を超えて私たちに伝えてくれること—
- 千 葉 海：古代ローマ都市ポンペイ—火山灰に埋もれた街と人の復元—

・指導教員 本城誠二

- 阿 部 航 大：文化としての HIP-HOP
- 櫻 井 晋一郎：ハーレム・ルネッサンスがアメリカに与えた影響
- 渋谷 優 衣：アメリカにおけるベジタリアニズム
- 高 橋 千 明：アメリカにおけるファッションの流行の背景
- 丹 野 優 人：日本のバドミントン文化
- 西 元 良 太：ビートルズ—今日のロック音楽に影響を与えた芸術家—
- 野 村 彩 夏：国民に愛されたヒーローたち—シービスケットとオグリキャップ—
- 橋 本 瞳：原節子とマリリン・モンロー—ヒロインから観る日米女性像の比較—
- 福 井 秀 行：Nirvana とアメリカン・ミュージック—The Pursuit of Freedom—
- 本 間 はつみ：アメリカの新聞、日本の新聞

・指導教員 安酸敏真

- 井 上 真 尚：「ダ・ヴィンチ・コード」とシオン修道会
- 木 戸 綾 奈：マイノリティがみたレコンキスタ（国土回復運動）
- 斉 藤 昌 洋：魔女裁判とフロイトの宗教観
- 佐々木 美 穂：ジャン＝ポール・サルトル
- 佐々木 恵 美：The Birth Of Philosophy 哲学の誕生 (Richard Tarnas, *The Passion of the Western Mind* [London, 1991], pp.19-25 の翻訳・註釈)
- 田 中 進 也：ショーペンハウアー哲学における意志の否定の倫理学はいかにして可能か

- 濱 本 佳 世：ルネサンス (Richard Tarnas, *The Passion of the Western Mind* [London, 1991], pp.224-230 の翻訳・註釈)
- 脇 川 亜梨沙："Astronomy" "Astrology" (Richard Tarnas, *The Passion of the Western Mind* [London, 1991], pp.79-84 の翻訳・註釈)
- 酒 井 勇 弥：宗教改革 (Richard Tarnas, *The Passion of the Western Mind* [London, 1991], pp.233-237 の翻訳・註釈)
- 赤 塚 正 訓：人間の知識欲について—ゲーテの『ファウスト』から読み取れること—
- 長 屋 結：西洋と日本・アジアをつないだ陶磁とマイセン磁器
- 八田堀 ひろみ：ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ

・指導教員 米坂スザンヌ

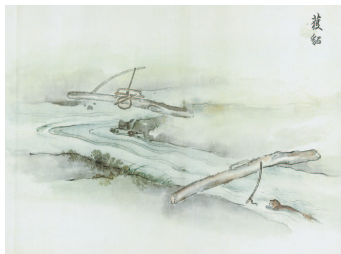
- 北 朋 晃：The Use of Chinese Characters in Japanese and Korean Writing Systems
- 西 川 雄 太：Education for Interpretation
- 柏 谷 真 吾：The Subtitling of English Movies into Japanese
- 金 田 真 美：Turn-taking: English and Japanese
- 熊 谷 龍：L2 Learning through Copying
- 高 倉 千賀栄：Conversation Analysis: The Difference of Back-channeling in English and Japanese Conversation
- 三 田 里 美：Language in Computer Mediated Communication
- 岸 本 恵 子：The History of Japanese English Grammar
- 國 分 涼：Persuasion by Speech
- 式 部 慈 史：Efficiency of Memorizing Academic Vocabulary with Affixes
- 山 崎 匠：Krashen's Input Hypothesis and Extensive Reading
- 佐 藤 友 子：American Sign Language
- 野 田 彩：Language and Gender

編 集 後 記

3月11日は4号館の最上階で委員会に出席していました。わたしの親戚、友人に今回の震災で直接の被害をこうむった人はいないのですが、報道をとおしてあれだけ多くの人の死と、いまも続く不幸とを目にすると、当分やすらかな気分にはなれそうにありません。（大谷 通順）

初めての編集委員で、相方の大谷先生にすっかりお世話になりました。次号ではもう少し役に立てますよう頑張りたいと思っています。大谷先生、ご指導のほど、よろしくお願いします。また、皆さまのご協力をお願いいたします。（池内 静司）

人文フォーラム 35：2011年8月3日発行 編集人：大谷 通順、池内 静司 発行人：安酸 敏眞
発行：北海学園大学人文学部(札幌市豊平区旭町4丁目1-40 TEL 011-841-1161) 印刷：(株)アイワード



表紙「獲貂」図

彩色、26.7 × 38 cm (間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』坤所収 北駕文庫所蔵)

間宮林蔵(安永9 [1790] ー天保15 [1844])は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地(樺太)探索の幕命を受け、文化5 (1808) 年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助(秦貞廉)が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8 [1811] 年に幕府へ献上された貞助自筆本(国立公文書館内閣文庫所蔵)に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2 (1855) 年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』坤巻、「産業部」の「漁獵」に収められている。本文中、山漁については「獸皮を以て山旦夷或は滿洲に交易する事、此島夷の専務とする處なれば、男夷専ら是を勤む」とあり、獸の中でも、殊に貂は、良質で美しい毛皮が高貴な人々の衣服・装飾品として好まれ、尾も冠飾等として珍重され高値で取引された。

林蔵は「獲貂」の方法を「貂を獵する事、圖のごとく溪間野中の小流に木を渡してたづなを設け獸來て此木を渡る時は、たづな發して獸の身體を約し水中に投ぜしむ。跋躍して遁れんとするといへども水中なれば自由ならず浮沈出沒の間終に水を飲て死す」と説明し、「本邦のはねわなと稱する者に異なる事なし」とする一方、「只木の横面に設け獸を得る時は水に投ぜしむることをなし、終日其側に居して是を窺わすといへども、獸の遁れ得ざるもふけをなせり。是を功とす」とその特徴を紹介して、貴重な貂を確実に捕らえる獵法を言葉巧みに伝えている。(北駕文庫 佐々木光子記)